

歌
集

遊
縁

遊
縁
の
衆

歌 集

遊 縁

遊縁の衆

発刊に寄せて

佐藤 紀之

この歌集「遊縁」は、月に一度岩波の石行寺で開かれる「遊縁の衆」に集う仲間が詠んだ短歌をまとめたものです。平成二十一年十一月二十日夜、市内の老舗料亭の侘びた茶室風の部屋で四人が酒を酌み交わしたことで産声を上げた「遊縁の衆」も早六年となりました。最初は茶道の手前を習うことから始めた会も、茶道はもちろん、写経、写真、短歌を嗜む者が、自分の嗜む世界に仲間を招き寄せて愉しんでみようと思ひ、「遊縁の衆」も今では総勢九名に及んでいます。

茶道を愉しんだ後の三ヶ月に一回の自詠の短歌の合評会ですが、最初は中学生の教科書に載っている短歌の教材から始まりました。私は、短歌同人に所属しておらず、中学校の国語教師として、趣味で黙々と学校現場の歌を詠み続けてきただけの者です。私の感想や言葉選びのさじ加減など、人生の先輩に大変失礼かと思いつつ、回を重ねていくうちに、参加者が三十一文字に自分の喜怒哀楽を解き放つ姿に驚かされるようになりました。まさしく古今和歌集の仮名序にある「大和心を目の当たりにした思いでした。

ここには、「遊縁の衆」九名の短歌が二十首ずつ掲載されています。短歌を自分の心模様を映す鏡として、また自分が刻んでいる時間の証として詠んだ私たちの短歌に、皆さんの心を少しでも寄せていただけたらありがたいです。

平成二十七年十一月二十五日

目次

発刊に寄せて 佐藤 紀之 三

掲載短歌

佐藤 紀之 (二十首) 五

佐藤 亮照 (二十首) 一二

佐藤 志亮 (二十首) 一九

松田 昌泰 (二十首) 二六

黒沼 貞志 (二十首) 三三

中村 昌平 (十首) 四〇

千葉 克明 (二十首) 四四

長谷川 美喜男 (二十首) 五一

寺崎 秀也 (二十首) 五八

あとがき 六五

補遺 (写真短歌について) 六七

佐藤 紀之

糸を引く痛み奏でるヴァイオリン少年の夏戻らぬ貝殻

最果ての潮の香りは鎌を振り上げし鼻面くすぐる五月

あおもりいぬねむいねむいとよつんばい

なんだこれはアートさげぶ

轟音を頭上に聞いてモツつまむ他生の縁に夜は煮えてゆく

春嵐枝は揺るる桜花散るまじひしと風とたわむる

樹木より削り出したる仏様ノミ跡覆う肌は匂える

まほろばの野ざらし石仏我が庭でみちのくの月仰ぎ見ており

きょうあすかなら生きめやも十一面観音像に我は祈りつ

ネジ花が路側帯の隙間より恥じらいながら揺れる水無月

噴水に虹と少女が指をさしわが口中のマシユマロ溶ける

さよならの言葉スプーンでかき回しあと一口が飲めぬ珈琲

目を閉じてつもりし時を数えれば除夜の一打をかき消す花火

奈良にて詠める歌三首

あきひさすうすやみにたつきけいてん

こだいのしらべにおどりだすかな

ゆうばへはまろきはしらをそめあげて

やいちのかひにかげかたぶきぬ

あおぎみるじゆういちめんのまなざしに

われはくずれてとけてゆくなり

夭折の画家有元利夫を詠む三首

指先で赤い実つまむ貴婦人の眼差し
我が背後を凝らす

花の舞う螺旋坂を歩まれる機械仕掛けの夫人の憂い

宙に浮く少女の誇れる微笑みは一人遊びを魅せるマジック

遊縁のプラットフォームでもがらといざ飲み干さん一杯の椀

綾なせる縁の集い石行寺瀬音清しと流れ遙かに

佐藤 亮照

ふと見れば幼き頃の落書きに今の自分のあゆみを思う

とりどりの色なす小さきもみじ葉の幹の太さに寺史を想えり

仏飯をついばむ姿ありがたし石灯籠の小鳥の家族

今春も期待通りに顔見せし残雪溶かす福寿の家族

震災の跡地に遊ぶ犬猫の淋しげな顔何をか思う

厳寒の床下に住む子ども猫暖かき春待ちつつ耐える

仏門に入りて迅ときことはや十年ありがたき教えありがたき日々

ふと見れば横たわる猫道端に厳しき冬を越したというに

はや十年決断し我ここに立ついにしえの祖はいかに思わん

はるばると孫ら来たりて帰りけり淋しさともに腰さするわれ

新しき年を迎えて想うこと他人のよろこび我の礎

特老で歌進むこと和やかに変わる顔つきオカリナの音

六十路半亡父のその時想う時さぞ辛からん寺の作務行

同い年友を送りしその時に俺は別よと思う愚かさ

湿雪の重みに屈し杉倒る五十余年の歴史去り行く

この冬も越したと思う池の主どこも探せど見えぬ鯉影

オカリナの音色とともにゆるむ顔届けるわれら感謝新たに

淡々と過ごせし日々は十余年千三百の寺歴に刻む

同年の友を重ねて送りたるいつの間にやら我が身歳降る

本堂の寒さ静けさ厳かさもみじ茶会の賑わい何処

佐藤 志亮

酷暑から初秋のたより彼岸花諸行無常と夕暮れの庭

今もなお学べる時に手を合しんわす教えの庭は真意しんの中に

秋風に舞い散るもみじの舞踏会箒をとめて時に佇む

幾千の灯りの舟が道となり迷わぬように浄土へつづく

晩秋に雪ともみじの二重奏見上げる山に三度目の雪

初雪に小さな足あと続くみち幼き笑顔が冬の味方に

雪の寺薄墨描く白と黒瞑想ふける色無き世界

雨の音ゆうげの匂い今日の空記憶のしおりあの日をひらく

今想う過ぎゆく時に足をとめ「不満が先か・・・。感謝が先か。」

春の風絆の糸に徳を織り誰かに届けと想いをはこぶ

雨つづき喜ぶ草木香りたつ生命の季節ありがたきかな

年を経て戻りし比叡よかわ横川の地修行の想い出背筋が伸びる

あと一步「ベストをつくせ」と背中押す

一隅照らさん他が為にぞと

宵の春霞城彩る花筏見上げる空にフラワーシャワー

背の君にたわむる霞城の花吹雪幾久しくと願うこの日を

縁結ぶ出雲に参る半夏生一昨年ひとり今年は二人

大久野島時代を超えてうさぎ島優しさあふれる平和の離島

川床で流るる鴨川目で追えば夕焼け照らす妻とおちよこ

今日もまた車飛び乗り鬼怒川へ一期一会も早二十年

「子曰く、惑わぬ四十」の歳となり

「こだわらない」を心がけよう

松田 昌泰

退院の告知に勝るものはなし見舞いが逆に元気いただく

退院の告知に喜ぶ満面にやわらか日射しも微笑み返す

淡雪を味方に入れてさざん花は庭先照らすかがり火となる

帰り際冷たい雨も気にならず今日もうれしや一座建立

初詣ツルツル階段足とられ願いはひとつ家内安全

生あれば触れることなき姉の頬その冷たさは今も手にあり

正月の喧騒去つて我が家には静寂だけが佇みてをり

閉め切つた静かな部屋に加湿器の单调な音吾が身を癒す

千歳山またお会いした二人連れ

「やあ、」とあいさつ親しきこめて

二人連れ吾が身と年も近いのか吹雪のなかの千歳山路に

年かさね会話少なきわが家でも茶を点てるとき虚心に還る

飲み易く点て易いねとうなずくも芸術性がイマイチと妻

ゆず肌の茶碗めざして今日もまた失敗続きに奥深さ知る

龍山に月のぼりきて凍てつくや靴音たててわが家へ急ぐ

急峻で悪戦苦闘ブナの森ハルセミが鳴き疲れ癒やされ

癒されてどこまで続くブナ林木洩れ日射してハルセミが鳴く

とき忘れ話し込むうちしんしんと冷えこむ山小屋雪間近かな

残照に長く伸びたる影ふたつふらつく老犬寄り添う主人

雪囲い終えて安堵の家の中落ち葉もおまけに追いかけてくる

廃校の跡地に残る歓声は佇む我に口惜しさじわり

黒沼 貞志

新幹線車窓の先の錦秋に思わず止まる弁当の箸

枯れ野原春の彩まぼろしに黄昏早く秋が身に染む（＊）

懐かしきむかしのテンポよみがえり委ねて歩む都心の雑踏

精検を待つ間の長さ息苦し交わす目線に共感覚ゆ

冬の列車は吹雪く山あい割きて行く

向う先にはフクシマの街（＊）

春の彼岸に残雪踏みて墓掃除想い行き交う彼岸と此岸

地鎮祭願い通じて雪の止み友の住居に祝詞流るる

誰そ彼が黄昏となる万葉の世界にひたりひとを想えり

祭りへと歩みを揃う親子連れすがしき初夏の山間の道（＊）

木漏日がいざなう小道その先の

休みどころにひとの気配なし（＊）

風邪に臥し久々に見る夢の中母の十八番の懐かしき粥

春蘭にまた逢えたねと声かけぬ春まだ浅き山路の片方かたえ（＊）

会合を終えたる昼を軒先の燕話題に再び賑わう

春寒し蝶もしばしの羽根休み山の小径の陽だまりの中（＊）

主去りし家の庭先草繁し人の気配の露もとどめず

高齢と言えども今はタブレット

連れ合い待たせて画像に残す（＊）

十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりぬマイライフワーク

ウェブサイト食のレシピが溢れおり貧しき時代遥かとなりて

雪いろの町を歩めば甦る遥か昔の通学の路

戦争を知らない世代が世の中を動かす社会いつか来た道

(*) 情景を写真に切り撮りその時の気持ちを短歌に詠んで写真の中に

挿入した「写真短歌」の作品 .. 補遺 (写真短歌について) 参照

中村 昌平

大雪の朝詠める歌二首

朝早く雪積もるなか愛犬と沈む足見て除雪を憂う

ため息を腕引く犬に聞かれたか「自分も元気出して行こうか！」

庭の鯉日が進むごと数減らす手に残る水語る喪失

春風に初めて感じる杉花粉空は晴れても心は晴れず

揺れるたび思い出すは闇の中ふと手を見れば汗ばむ携帯

赤々と朝日に浮かぶ さくらんぼさわやかな風収穫の時

初雪に染まる庭見て苦笑い積もる嬉しさ雪掻きの日々

わらび園日差しに焼かれ動かす手流れる汗とこぼれる笑顔

接近すレンズ全く気にならず七回数えるもみじの茶会

雪駆ける黒き愛犬時重ね白髪増えるも変わらぬ元氣

千葉 克明

残雪の山並み見える白鷹路堂々そびゆ山形の春

新緑の林の中で野良仕事生きる喜び湧き出するかな

車窓より眺める田んぼ青々と遅れし田植え取り戻したり

間伐を気づかず過ごす今の人もやしの如き杉の木あわれ

爺婆の姿見て笑う孫の顔いとしさいや増すはるばるの旅

絵具持つ手を震わせて物語り可愛さばかり孫の横顔

けずりてもけずりても重し楽茶碗望みの姿いつか見るらん

腰痛に人並み加齢と励まされ日々の通院老いを支えん

弔いを和ませるかな別れの会これも時代のなせる業かな

刈り取りしにくい掛けの稲点在し昔ながらの刈り干し想う

線路沿い切り倒された木々の山のびすぎしゆえ杉の木あわれ

木枯らしが運ぶ落ち葉の後始末辛くもありし楽しくもあり

和服着て茶を点てし我初めての日本男子の根底おぼゆ

国々の無益な争い果てしなく賢者居ぬまま時は過ぎゆく

ピアノ弾き野球のプロ野球望むおさな子は

力強くもやさしくもあり

早や四歳理屈も言える智慧がつき祖父母笑わす箱根の旅路

この春は寒暖の差のきびしさや梅と桜がきそえる悲哀

手ひねりで削り仕上げる楽茶碗それぞれ違う顔を見せ居り

孫と行く桜並木の花吹雪命の絆深くおぼゆる

新しき歌舞伎座もうで初めての玉三郎の女形絶品

長谷川 美喜男

馬見ヶ崎桜トンネルドライブす天の川なるテールのランプ

一周忌父の遺品の「道」の書にほのかに匂う墨の残り香

空梅雨の雨が恋しとあじさいは参道脇にかわき咲きたり

円安に日本経済助けられ株高か躍る朝刊見出し

ベトナムの息子より届きし洋蘭のあわい香りに南国思ふ

猛暑日はステテコ姿の縁側でビール片手にだだちやをつまむ

朝顔のこぼれし種がぐんぐんとつるは伸びゆく初夏の陽受けて

息子らに若い若いと乗せられて居合を始め十年過ぎぬ

梅雨時の食卓並ぶさくらんぼつまみ食いして夏を味わう

誰だろう毎年届く年賀状思い出せずに返信送る

梅雨入りし喜び遊ぶかわず等がつくる川面の波紋を見やる

還暦を迎えて思う我が人生酸いも甘いもなつかしき日々

都会から田舎に着いたその瞬間ネコはこたつでブルブル震え

寒い日はふとん出られずストーブをつけてじっと見る温度計

紅花の郷にたなびく鯉のぼり桜の波にゆらゆらゆらと

成田より日本を飛び出す次男坊うれしくもあり寂しくもあり

極寒のモスクワリバー凍りつき銀河をはしる群れなす小鳥

桜ちる川辺に遊ぶ鯉のぼり短い春を惜しむがごとく

茅葺きの屋根より抜きしワラの穂をけなげに運ぶすずめの羽音

春風と川を登りし桜ます傷つきながら子孫を残す

寺崎 秀也

春来たり見せたかったな亡き人の好きだったあの桜の花を

庭園に流れ落ちたる水飛沫眺め良きかな菩提寺の滝

御本尊南無阿弥陀仏手を合わせ菩提供養思いを込めて

岩波の十一面の観世音真言唱え護摩供を修す

謹みてみ寺の中でご和讃を唱え上げたや叡山流

鳴り響くみ寺の鐘の音何処までも旅路の果ての弥陀の国へと

慈悲深き十二仏の軸を掛け想ひ忍びし追善供養

秋の空一期一会のおもてなしもみじ彩る茶の湯の集い

おごそかに和讃・詠歌にオカリナと音色奏でる霜月の寺

時代ときを越え守り伝えし祈りあり法の灯火比叡の深山

目隠しし心静かにみ仏とご縁を結ぶかんじょう灌頂の堂

願い込め和讃検定福島へ記憶に残る一泊二日

山形の夏を彩る踊り手の掛け声響く花笠まつり

盂蘭盆会精霊棚をこしらえて提灯ともし御霊を祀る

善光寺七年振りの御開帳回向柱に願いを届ける

護摩堂で祈願太鼓の乱れ打ち唱えし経に想いを込める

月一度み寺に集う此のご縁有難きかな遊縁の衆

七回忌早六年の時間^{とき}経ちて功德を積みし仏に帰依す

巡礼し心経唱え回向する十回目なり最上結願

一服のお茶の点て方教わるも奥深きなり茶の湯の作法

あとがき

黒 沼 貞 志

「発刊に寄せて」の記載のように人生を数倍楽しむ会「遊縁の衆」をスタートしたのが平成二十二年二月、そのコンセプトを「遊びごころ」と「学ぶごころ」の醸成を図ろうとして次の四つのテーマで毎月一回の開催を基本に進めてきました。

- ・ 茶という時空を楽しむ
- ・ 歌に触れる
- ・ 写経（途中から止観（座禅）も実施）で心を鎮める
- ・ 写真素材に感性の感度を上げる

短歌の例会は平成二十二年十月の第一回を皮切りに催され、平成二十七年七月で二十三回を数えました。短歌例会を通じてメンバーが詠んだ多くの短歌を一冊の歌集にしてはどうかという話が昨秋に持ち上がり、五年目の今年に上梓の運びとなりました。

歌集の歌はこれまでの例会に提出した歌より自選した二十首に先達者佐藤紀之氏のレビューを加味して掲載しております。

途中からこの会に参加した人には少しばかり負担となったと思われるのですが、どのような場合においてもターゲットや期限を持つことにより成果が上がることは周知のとおりです。

この一冊が「遊縁の衆」の四つのテーマの一つ「歌に触れる」の成果となりメンバーの更なる精進が期待されます。

歌集に掲載された短歌の作者は次の通りです（順不同、敬称略）

佐藤 紀之（先達）・佐藤 亮照・佐藤 志亮・松田 昌泰
黒沼 貞志（事務局）・中村 昌平・千葉 克明・長谷川 美喜男
寺崎 秀也

なお、本歌集に対するご意見などは次の「遊縁の衆」事務局（黒沼 まで）へ一報願います。

〒990-0831 山形市西田一丁目十二番十号

023-646-2448（勤務先）又は 090-252-214548

補遺（写真短歌について）

黒沼 貞志

写真を長年続けてきた私が「遊縁の衆」で短歌を嗜むようになり、短歌も写真もそれぞれ創るプロセスに共通点があると気付きました。

そしてこの二つを融合させたら面白いと考えて「情景を切り撮って詠う」ということを試行しながら【写真短歌】として紹介しています。

そのメリットは相乗効果と補完効果に尽きると思いますが、短歌を独立した作品とする場合はその推敲に工夫が必要とも言えます。

それはそれとして、この写真短歌の広がりについて期待を持っているのも事実です。

ここに私の作品数点を紹介して皆さんの関心に少しでも届くことを願っています。



祭りへと歩みを揃う親子連れ
すがすがしい初夏の山間の道



歌集

ゆ えん
遊 縁

著者 遊縁の衆

2017年11月25日発行

発行者 遊縁の衆

発行所 「遊縁の衆」事務局

〒990-0831 山形市西田1-12-10

023-646-2448 (勤務先) 又は 090-2522-4548

印刷所 【銀河書籍】(有)ニシダ印刷製本

領価 非売品

© Yuen no Shuu 2015